二〇二二年、今年も「探究」の夏がやってきた

北野小学校長　丹羽　郁人

大人自身が探究者になること。学ぶことの喜びを忘れず、今でも好奇心や探究心を持ち続けていたい。

小さいころから虫は苦手である。というか、嫌いである。ちょっとした茂みに入ると、体中が痒くなる。虫は苦手ではあるが、アリだけは身近な存在だった。アリは食べ物を見つけると、仲間を呼んで、自分の体の何倍もする食べ物をえっさえっさと巣まで運ぶ。

でも、どうやって食べ物をあることを教えているのかなあ？　触角を合わせることで、どれだけの情報を伝えられるのかなあ？　それがおもしろくて、それを知りたくて、夏休みに一日中見ていたこともある。

さて、義父が、畑にいたというカブトムシの幼虫なるものを持ってきてくれた二〇一九年（令和元年）から、息子と共に、私のカブトムシの飼育活動が始まった。昨年の夏も、カブトムシの幼虫はさなぎになり、成虫として、地面から出てきた。それと同時に、なぜかカブトムシがなぜか我が家にブンブン飛んできたのだ。家は住宅地にあり、まわりの山や森はない。特に街燈、照明をつけているわけではない。餌も、いわゆる「昆虫ゼリー」であり、ぷんぷん匂うものでもない。では、なぜ我が家にカブトムシが数匹も飛んでくるのかなあ？

初めは、飼育していたカブトムシが逃げ出したと思っていた。だが、明らかに見たこともない（すなわち、色の異なる）カブトムシが連日、我が家をノックするのだ。飼育中のカブトムシが呼んでいるとしか思えないのである。では、どういう手段で呼んでいるのか？　どういう方法で仲間がいることを知りえるのか？　音か？　匂いか？　振動か？　超音波か？　それとも、たんなる偶然なのか？

夜遅くまで観察し続けた。カブトムシの関係する本を、何冊も読みあさった。それでもまだまだ「？」が多い。それがおもしろい。探究が続くことが、実に楽しい。そして、この楽しさを子供たちにも感じてほしいのである。

ファーブルは、泥まみれになりながら、昆虫を追いかけた。エジソンは、何度も何度も、何度も失敗をした。

「なぜ」と考えるかわりに、「そうなっているんだ」という退屈な答えで、どんな疑問もあっさり打ち消してしまうのが「大人」だとしたら、私は少年でい続けたい。

「驚きと感動の種をまき、探究心の火をつける学び」の実現へ。

そのためには、まず、我々が、「驚きや感動」をもつ探究者であり続けること。それこそがその実現に向けた第一歩ではあるまいか。

二〇二二年　夏、探究は続く。

（二〇二二・七・一五）